



水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜』（時評・書評・展示評）

吉原, 大志

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 3:121-129

(Issue Date)

2011-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81003381>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003381>



水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著 『モダン都市の系譜』

吉原 大志

はじめに

本書は、地理学を専門とする三人の著者が、京阪神地域を中心に、「社会的、文化的、経済的な事象をもつと生々しく、そしてクリティカルに地図から読み取ること、そして実際のフィールドワークでそうした都市の空間―社会に切り込むための鋭利な視角を示すこと」を目論んで著されたものである。そこには、本書の主題である「読図」と、実際のフィールドワークを通じて、「都市を理解するために必要な地と図を往還する技」を読者に磨いてもらいたいという、著者たちの願

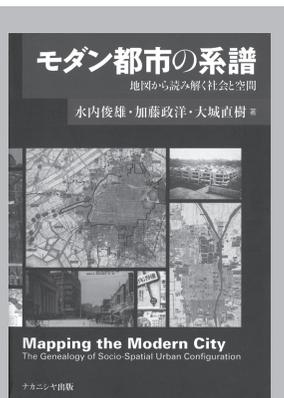
いが込められている(一〇二頁)。

評者は、日本史のなかでもいわゆる近代都市史を学ぶ者ではない。地理学に関する専門的な知見を身につけているわけではなく、そのため本稿では、評者が本書から考えたことを中心に述べていきたい。

一 本書の構成と内容

詳細な目次は省略するが、本書は四部から成っており、京阪神を中心にその周辺地域も含めて対象としながら、近世から現代まで広い時期を扱っている。以下、大まかにその内容をまとめることとする。

「第一部 近代都市空間の成立」。まず近代都市成立の前提



水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著
『モダン都市の系譜』
地図から読み解く社会と空間

ナカニシヤ出版
2008年5月発行
A5判 335頁
税込2,940円

として近世城下町が対象となる。「都市計画的」な城下町の周辺には、地理的・社会的な周縁地区が形成されており、これが近代都市におけるインナーリング形成の前提となる（第一章）。こうした城下町では、明治期に入ると武家人口の消滅にともない中心部に広大な空闲地が生じ、その処理が課題となった。そして明治政府による地方統治（行政・産業・軍事・教育…）のなかで工業化が進展し、都市インフラ導入にともなう市街地の改造が遂行される。この過程において周辺部が市街地化していくが、こうした外延的拡大は都市計画の不在によって「無秩序で自然発生的な」インナーリング形成をもたらしこととなった（第二・三章）。

「第II部 モダン都市」。一九〇〇年代以降の鉄道の普及・拡大にともない、職住分離と新たな消費生活様式をもつ俸給生活者を主要なターゲットとした鉄道会社・土地会社による郊外開発が、インナーリングのさらに外側で進展し（第四章）、これと並行するかたちで都市計画法にもとづく市街地改造や、都市貧困層を対象とした体系的な社会政策が展開するが、その一方で盛り場・商店街・百貨店といった新たな消費空間の構造が示される（第五・六章）。

「第III部 戦災と復興」。総合的国土利用や都市分散政策と

いった戦時期都市計画による、地方工業都市の成立、住宅営団の団地建設、そして建物疎開・空襲・戦災復興など、戦時から戦後にかけての地域の変容が跡づけられる（第七・八章）。

「第IV部 高度成長と現代の都市空間」。戦災復興過程のインナーリングにおける住宅改良事業の取り組みや、郊外の大規模なニュータウン開発とともに、旧市街地での再開発事業が取り上げられる（第九・一〇章）。そして最後は現代都市における分断の存在が、ホームレスや大規模商業施設立地などを事例に照らしだされる（第十一章）。

本書は、京阪神を足場にしながら、和歌山や姫路などの地方都市、さらに箕面などの郊外住宅地まで対象としており、扱う時期も近世から現代までと、広い視野のもと論述されている。また地図の加工から多くの情報を読み取っている点などは、歴史学の側から学ぶ点が多い。そして各章に付された各論部分では、地図だけではなく文学作品なども史料として積極的に活用され、読図の作業とともに論旨に深みを与えている。

このように本書の成果から学ぶ点は多く、個々の論点を詳細に取り上げるべきである。しかし紙幅の関係もあることから、以下では三つの論点にしぼって本書の内容を検討するこ

とにしたい。

二 日本近代都市史研究とのかかわりから

本書の序章において「現代都市をよりよく理解するためには、明治維新以前、前近代の都市空間形成の論理を押さえておく必要がある。また、本書の対象とする時代は、前近代から現代までと長いスパンにわたるが、都市研究において歴史性を重んじるのであれば、近代都市史研究の視座は確実に押さえておかなければならない」(三頁)と述べられている通り、著者の基本的スタンスは近代都市史研究の方法を踏まえたものであることが表明されている。そこでここでは、近代都市史研究とのかかわりのなから、本書の意義を検討してみたい。

(一) 都市空間を捉えること

評者はまず、都市空間の形成とその歴史の変容過程を通じて的に捉えた本書の成果を高く評価したい。日本近代都市史研究は、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、都市問題の起源や、その解決策を歴史のなかに見出すという現実的な問

題関心にもとづいて展開したが、一九八〇年代前後から新たな段階へと移行し、近代社会の特質を明らかにするための戦略として都市の歴史を捉える方法へと転換していった。⁽²⁾こうした研究のなかから構築された枠組みは現在でも議論の前提になっているものが少なくないが、その多くは都市の政治支配構造の解明に重点があり、必ずしも都市空間の問題が積極的に論じられてきたわけではないことには注意する必要がある。

たしかに都市空間の形成・変容を問題とする研究がなかったわけではないが、⁽³⁾本書のようにその歴史的過程を通史的にたどっていった研究は稀であろう。都市史研究の側が十分に扱ってこなかった都市空間の形成・変容という論点を積極的に論じた本書の意義は、高く評価すべきものと考ええる。また近年、土地所有や工場立地などの局面から都市社会構造を解明する研究があらわれてきたことを踏まえれば、⁽⁴⁾こうした都市史研究の新たな動向をより深化させるためにも、本書の成果から学ぶべき点が多い。

そして本書の特徴のひとつとして、近世から現代まで広い時期を対象としている点も重要であろう。評者の見る限り、これまでの都市史研究のなかでは、本書のように特定地域に

足場を置かたちで通史的に論じた研究は意外と少ない。特に戦時から戦後、さらに高度成長を経て現代都市の問題ともなれば、いまだ都市史研究の側では十分に対象化できていないのが現状ではないだろうか。

著者の基本的スタンスにもあるように、本書を通じて地理学と歴史学とのあいだで都市の歴史をめぐる対話の場が形成されたことの意義は大きい。

(二) 「地理的に分節化された空間」とは何か

ここで、本書のなかで地理学と都市史との接点が、どのように設定されているのかを検討してみよう。本書は「近代都市史研究の成果をふまえた」と表明しているが(三頁)、具体的には佐賀朝による研究史整理をもとに、都市政治史に関する研究、都市下層社会に関する研究、都市を国民国家形成の空間的装置として考察する研究、地域内社会構造に関する都市社会史的研究と、都市史研究を四つに分類したうえで、後三者の研究を「分節化された地域、空間を基礎に論が展開」している⁵と捉え、そこに地理学と都市史との「親和性」を見出している。そして、「前近代から近代への都市史研究において、都市内部で地理的に分節化された空間が都市の機能と

して存在すること、そうした前近代都市空間の分節化が近代都市に固有の地域社会構造の基盤となっていること、これらを理解することが都市政策や都市支配、社会構造、空間構造の一体的把握」につながる、そこから「歴史地理的な視座」を得ることができるという(三頁)。この「歴史地理的な視座」とは、序章の文脈からすれば、「都市の空間―社会を構制する営為や諸力は、景観のなかにはつきりと刻み込まれている」から(二頁)、「地図的表象を超えたところに空間―社会の構制を嗅ぎ取る感性」(二頁)のことを指すのであろう。

しかし、佐賀の整理にもとづく近代都市史研究の四類型について言えば、評者は四つとも「地理的に分節化された空間」を「近代都市に固有の地域社会構造の基盤」と捉えていたのではないかと考える。著者は都市政治史からは地理学との親和性を直接見出しているわけではないようであるが、都市の政治支配を支える予選体制について明らかにした原田敬一の研究や、予選体制の基盤としての学区の機能を具体的に示した松下孝昭の研究を想起すれば⁶、そもそもこれまでの近代都市史研究は、都市政治史も含めて「地理的に分節化された空間」を基礎に論が展開していたのではないかと評者には思われる。

だとすれば、著者の言う「地理的に分節化された空間」とは何か、改めて問われねばならないだろう。「分節」という点にかかわって、吉田伸之は、「社会的権力が領主などとは異なる位相で磁極となり、形成される社会秩序の有り様を「分節構造」として把握し、さらに「社会的権力によって秩序づけられ、構造化された社会、すなわち分節構造が一定の空間的な広がりを見せたものを、「地域」とよぶ」と述べている^⑧。吉田のこの議論は近世都市史研究の成果から導き出されたものであるが、少なくとも評者には、吉田は「地理的に分節化された空間」というよりも、地理的に分節化された空間をめぐる人々の諸関係が空間的に広がりをもつたものを「地域」と把握しているように読める。

ここで再び本書の内容に立ち返ってみれば、都市空間の形成・変容を分析する際に著者は「都市の作り手に常に着目する」としている(四頁)。行論のなかでは具体的に地域住民や都市行政、鉄道会社・土地会社、住宅営団などが事例として取り上げられているのであるが、こうした「都市の作り手」は「地理的に分節化された空間」を基礎にすることでもうまく捉えられる対象であろうか。本書が一貫して着目するインナーリングについても、著者の言うように市街地が無秩序に、

そして自然発生的に拡大した結果形成されるものであるとすれば、地理的に截然と分節化されたかたちで形成されるものであろうか。むしろ本書のなかで著者が着目した空間や「都市の作り手」といったものは、従来の近代都市史研究のように地理的に分節化することで捉えられるものではなく、空間を形成・変化する主体や、そこに住まう人々との社会的関係のなかで浮かび上がってくる対象ではないか。その意味で本書で取り上げられた対象は、むしろ近世都市史研究のなかで吉田が見出したような「分節」化された空間に近いものと評者は理解したが、どうだろうか。著者の言う近代都市史研究の視座は、本書において取り組まれた作業のなかで、どのような点で有効であったのか、評者には疑問である。

三 インナーリング

次に、本書のなかでインナーリングへの着目が一貫してなされていることについて検討したい。「なぜ周辺部にこだわるのか。日本の都市の近代化は(中略)市街地が旧城下町周辺の地域を飲み込んで成長してゆく過程でもあった」(二二頁)との説明があるように、本書が一貫してインナーリング

に着目するのは、著者が近代都市を特性づける要素のひとつとしてインナーリングを捉えているからであろう。しかし本書各章で論じられた旧市街地や郊外の記述とあわせてどのような都市像が描けるのかは、必ずしも明確ではない。それぞれの対象が並列的に論じられているという、構成上の問題があるのかもしれない。

これにかかわって、近代都市史研究の成果を省みれば、「インナーリング」という言葉こそ用いられていないものの、一九八〇～九〇年代においては「下層社会」論として同様の論点が扱われてきた。たとえば神戸の都市「下層社会」を対象とした布川弘の研究によれば、公権力に対する「下層社会」住民の生活保障要求が、住宅・消費などといった都市基盤整備にかかわる行政のあり方を規定するという⁹⁾。ここから布川は、近代国家の存立基盤としての「下層社会」を見出すのであるが、こうした立論のしかたには、「下層社会」と呼ばれる地域への政策的対応の必要が、市政レベル、ひいては国家レベルの政治史を規定するという問題関心があつたと評者は理解している。つまり「下層社会」を、それ単体として論じるのではなく、広く日本近代社会を歴史的に捉える際のキイとして都市および都市「下層社会」が対象とされていたので

ある。

こうした近代都市史研究における「下層社会」論の視座と、本書でのインナーリング論とは、どのような対話が可能なのであろうか。そして旧市街地・郊外とのかかわりでインナーリングを論じた場合、いかなる都市像が見出せるのか、これは本書だけに与えられた課題ではなく、近代都市史研究にも共通する課題であろう。

四 現代都市論として

ここまで本書の方法・内容に関する部分を見てきたが、本書のなかで見逃してはならないのが、第一章「大都市の光と影」である。都市空間の形成とその構造・展開を論じる本書にあつて、第二章は少し毛色のちがう内容を持っている。評者はこの章を、著者の現代都市論として読んだ。

さきに述べたようにこの章では、都市社会における「分断」、つまり「貧困や不平等の境遇におかれた人たちから富める者、そして力のある者を切り離す分割線」を、現代の大規模再開発プロジェクトやホームレスの問題から論じ、それを「光と影」と表現している(三三〇頁)。本書が一貫してインナー

リングに着目するのも、こうした現代都市社会における「分断」を、「インナーリングの多様な再興」(三二六頁)という課題意識のもと、都市空間の形成・変容という論点から歴史的に捉えようとするものであったと言えよう。こうした著者の課題意識には賛意を表したい。

しかし本書のなかで明らかにされたように、都市空間の「分断」あるいは「光と影」は、都市社会のなかで通時代的に存在し続けたものであり、「分断」や「光と影」といった捉え方は、逆に現代都市固有の問題をつかみ損ねることにつながりはしないか、との危惧が残る。本書では戦後都市社会の変容について、戦災復興、高度成長、バブルといった時期区分が主になされていたが、より深めたかたちで段階的に捉える必要があったのではないか。具体的には、新自由主義にもとづく資本のグローバルな広がりという現状を、論点として組み込むことはできなかっただろうか。

特に一九八〇年代以降については、対米協調外交のもとでの経済構造調整政策による規制緩和をはじめとした日本経済のグローバル化、そして東京一極集中は、京阪神の都市にとっても、その存立基盤である経済構造の変動という点で大きなインパクトがあったはずである。⁽¹⁰⁾たとえば本書で取り上げら

れた現在のホームレス現象に関しては、単にバブル経済の崩壊という要因のみでは捉えられないだろう。バブル以前からの都市計画規制緩和にとまなう民間資本の導入や、その後の地価暴騰による住宅地取得の困難と公共住宅供給戸数の減少など、「人びとの生活空間であった居住環境を経済空間というより投資空間に転換させた」住宅政策のあり方⁽¹¹⁾も、居住をめぐるセーフティネットが十分に機能を果たせない要因として位置付ける必要があるのではないだろうか。

そして以上のような疑問は、本書全体に通じても言えることであろう。つまり都市空間が形成され、そこに人々が住み、さらに空間が改変されながら新たな都市空間が形成されていく一連の過程のなかで国家や資本が果たす役割を、我々は如何に捉えればいいのか。著者の言う「都市空間を構築していく政治力学」(三三〇頁)の内実をこそ問わねばならないだろう。そして我々は、高度資本主義がグローバルな枠組みで展開するなか、「地理的に分節化された空間」に足場を置きながら都市を考察の対象とするには、いかなる方法をもって臨めばいいのだろうか。研究の中身としても、その研究の現代的課題としても、評者は第一章を読み終えた後、そのように思い至った。

おわりに

以上、本書が有する論点を評者なりにまとめてきた。多くの誤読や、的外れな批判があると思うが、ご海容願いたい。最後に、本書のなかの神戸ハーバーランドに関する記述(三二七〜三三一頁)について若干触れておきたい。

神戸の代表的な観光地であるハーバーランドは、もともと三菱倉庫や旧国鉄湊川貨物駅の敷地であつたが、輸送手段・港湾機能の変化を背景としてこの敷地は再開発の対象となり、複合商業施設、ホテル、百貨店、オフィスビル、集合住宅によって構成される場所へと様変わりした場所である。このなかの主要な商業施設「モザイク」について著者は、「モザイク」の名のとおり、脈絡もなく、印象的な風景が寄せ集められている」と評し(三二八頁)、改装・テナント替えが続く現状に対して、「都市内部のそれぞれの場所には固有のコンテクストを持った系譜が存在する。これは事実である。それを無視して(中略)周囲とは切断して再開発が行なわれた現場には、何か再開発のコンセプトから逸脱するものが残されてしまう」と述べる(三三〇頁)。元町商店街や新開

地などの周辺地域とは切り離されたかたちでつくられたハーバーランドの特質を的確に捉えた表現である^(註)。

こうした、ともすれば街や地域固有の歴史的文脈を見失つてしまふような都市景観のなかで生きる我々にとって、本書が、「実際の「地」を自ら歩き、都市形成の過程を学び」取るための(二頁)、最適の素材となることは間違いない。

〔付記〕

本稿は、兵庫津・神戸研究会における本書講読の成果の一部でもある。研究会参加者に、末尾ながら謝意を表したい。

註

(1) 本書の書評としては、すでに能川泰治「日本近現代史都市史研究は都市空間をどう論じるか?——水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜』の書評を通じて」『歴史科学』一九七号、二〇〇九年がある。あわせて参照されたい。

(2) 原田敬一「都市問題論から近代社会論へ」『歴史評論』四七一号、一九八九年。後に同『日本近代都市史研究』思文閣、一九九七年に所収。

(3) たとえば石塚裕道『日本近代都市論』東京大学出版会、一九九一年や、石田頼房『日本近代都市計画史研究』柏書房、一九八七年など。

- (4) 佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』日本経済評論社、二〇〇七年。島田克彦「第一次大戦期の都市社会と米騒動」『部落問題研究』一七六号、二〇〇六年。広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』部落問題研究所、二〇一〇年など。
- (5) 佐賀朝「近代巨大都市の社会構造——明治期大阪の都市内地域」吉田伸之ほか編『新体系日本史六 都市社会史』山川出版社、二〇〇一年。
- (6) 前掲原田『日本近代都市史研究』、松下孝昭「大阪市学区廃止問題の展開」『日本史研究』二九一号、一九八六年。
- (7) 吉田伸之『成熟する江戸』講談社学術文庫、二〇〇九年、一四頁。
- (8) 前掲吉田『成熟する江戸』三六三頁。
- (9) 布川弘『神戸における都市「下層社会」の形成と構造』兵庫部落問題研究所、一九九三年。
- (10) 日本経済のグローバル化や東京一極集中構造が地域経済に及ぼす影響については、岡田知弘・川瀬光義・鈴木誠・富樫幸一『国際化時代の地域経済学』（第三版）有斐閣、二〇〇八年などを参照。
- (11) 本間義人『居住の貧困』岩波新書、六五頁。
- (12) こうしたハーバーランドの捉え方については、江弘毅『「街的」ということ』（講談社現代新書、二〇〇六年）が、元町商店街との対比のなかでハーバーランドを取り上げ、同様の指摘をしている。「街」というものは店の集積によって成り立っているのだが、その個店が編集され情報化されてしまうと、前から後ろからばらめくるだけのファッションカタログ誌みたいな気がしてぞつとする」（六一頁）。